

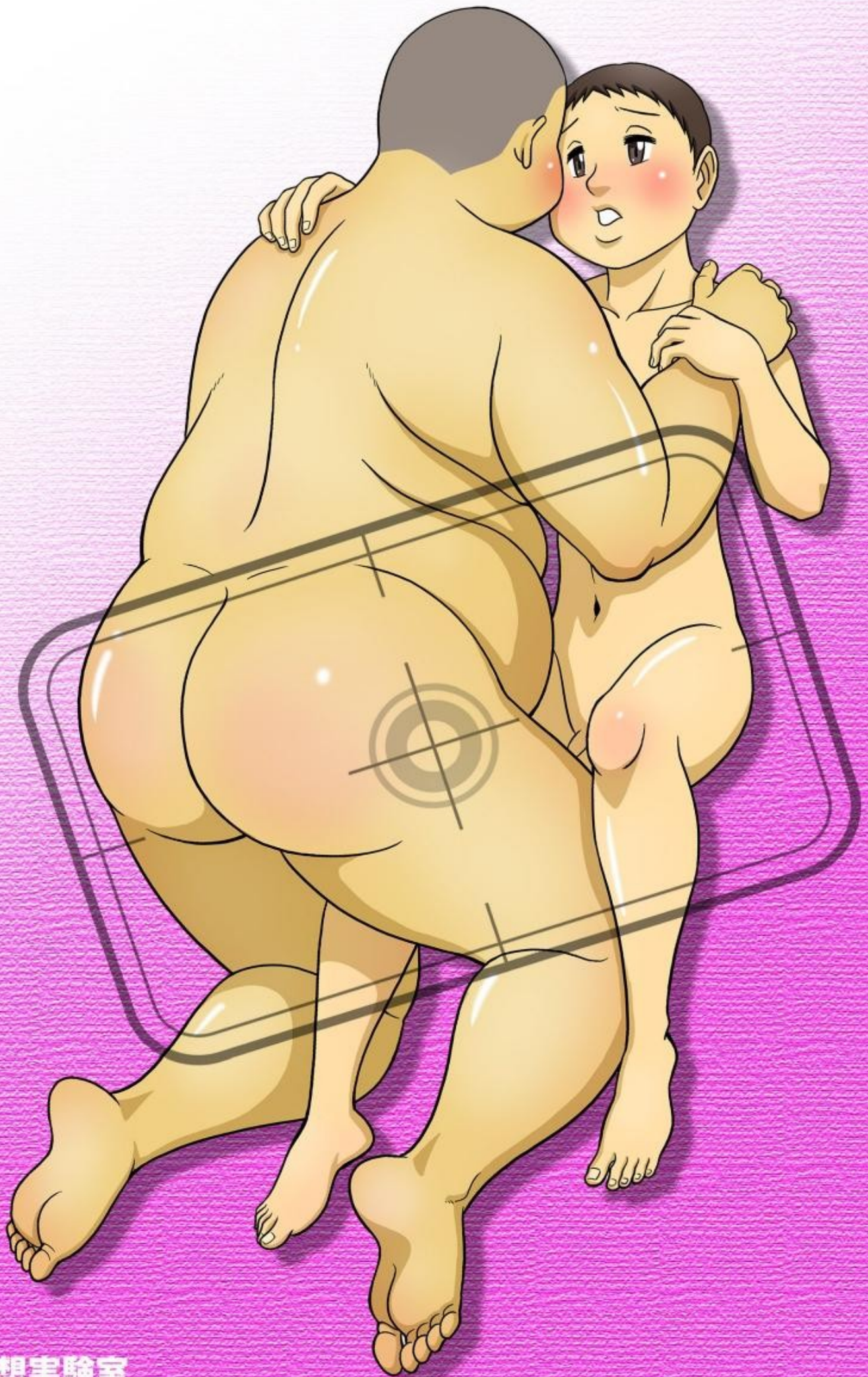
# SECRET

GOHAN  
COMIC



18  
ADULT  
ONLY

秘密の兄弟・弟編



ああ…  
どしてや

僕…またやっちゃった

もう3年生になるのに  
なんでいつまでたっても  
治らないんだらう

僕やっぱり何処か  
おかしいのかなあ…?

くっしゅん…



ん…  
47…



「やっぱりちやつてたか…  
なんか匂いするなあと思ったら…」

「…ごめんさい…」



「謝らなくていいから…  
ほらちやつとそれ脱ぎな」

「し…」

もそ…  
もそ…



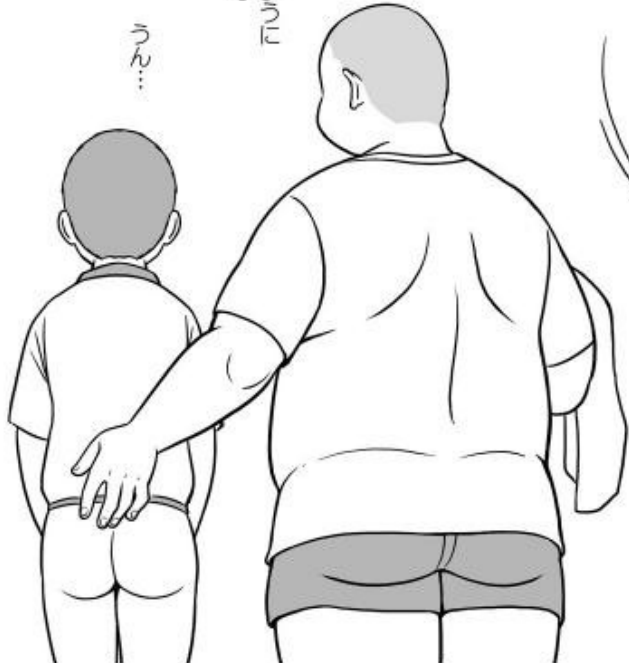
僕とお兄ちゃんは一  
緒の部屋で  
布団を並べて寝ていま  
す

もうちよつと前は  
同じ布団で  
一緒に寝てただけど  
いつからか別々に  
寝るようになった

…そりゃそうだよ

オネシヨするよう  
な弟となんか一緒に  
寝たくないよね…

お母さんを  
起こさないように  
そお…



うん…

お兄ちゃん

僕と4つ違いのお兄ちゃん

お母さんが  
外に働きに出ている間  
代りに家事をこなしている  
働き者のお兄ちゃん

ジャブ  
ジャブ...

中学生になって  
体が大きくなってからは

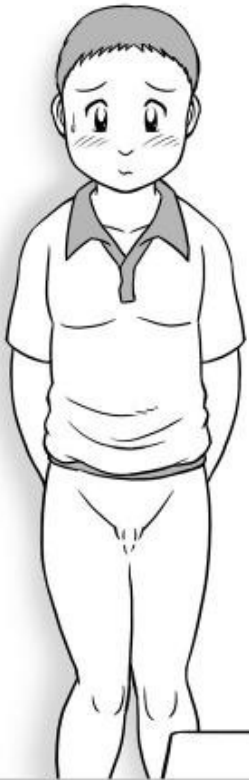
ぶつきらぼうで

あまり笑わなくなつて

僕とあんまり

遊んでくれなくなつたけど

今でも変わらずに  
僕の面倒を見てくれる  
お兄ちゃん...



でも... ゼロシケリ

恥ずかしくて  
お兄ちゃんの顔を  
まともに見られない...

裸を見られるのなんて  
恥ずかしくないよ  
だって兄弟だもん

もじ...

もじ...



でも二年生にもなつて  
オネシヨする弟って  
お兄ちゃんにゼロシ  
思われてるんだろーと思つたら  
ゼロシても...



夜にあんまり  
うるさくすると  
隣の部屋で寝てる  
お母さんまで  
起こしちゃうから



だからこんな時間  
にお風呂に入る時は  
シャワーなんか使わない

桶に少しだけお湯を入れて…

スポンジを使わないで  
手で石鹸を泡立てて…

お兄ちゃんは  
汚れた僕のオチンチンを  
いつもゆっくりゆっくり  
丁寧に洗ってくれる  
まるで生まれたての  
赤ちゃんの肌を  
洗ってるみたいだ…

…うん  
それは  
いいんだけど…  
洗って  
もらつといて  
こんなコト  
言うのも  
変な話だけど…



いいよお兄ちゃん  
そんな熱心に洗わなくても  
自分でだつて洗えるんだし  
お湯でチャツチャと  
洗い流すくらいで充分じゃない  
そんな  
貴重品でも扱つみたいだ  
丁寧に丁寧に洗わなかつたって…



ヌル…  
ヌル…

あつ…  
くすぐりたいよ  
そこはやめて…  
ソコは洗わなくても  
いいよ…  
そんな下口まで  
汚れてないよ…  
多分…

くちゅっ  
くちゅっ

入ってるよお…  
入っちゃってるよお…  
指…指…

そんな下口まで  
熱心に洗われたら…

ああ…ああ…

毛にか  
毛にか

…ほじ  
またこんななっちゃった…

何でか解らないけど

お兄ちゃんに洗ってもらった度に  
僕のオチンチンは硬くなって…  
上を向いちゃって…

僕はいつも  
変な気分になっちゃって…

そんな  
恥ずかしがってる  
僕を見て  
お兄ちゃんはいつも  
からかうように笑うんだ

「お前も一丁前の  
男なんだな」…なんて  
訳わかんない「丁」ってさ

なで"なで"

こっちは  
面白くないよ

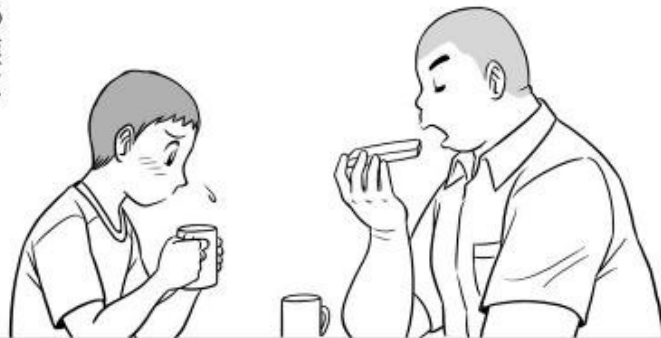
普段無愛想なクセに  
なんでこんな時ばかり  
笑ってんだよもあ…





それから  
新しいパンツと  
パジャマに着替えて  
押入れから新しい布団を  
引っ張り出して  
(濡れた布団は夜のうちに  
外に干しておいて)  
何もなかったみたい  
に  
また寝るんだけど

なんでだろう  
もうオシッコなんか  
出ないはずなのに  
いつも  
オチンチンが  
ウズウズしちやつて...



ああ僕は  
一体いくつになるまで  
こんな  
気まずい気分の朝を  
迎えるんだろ...?

目が覚めた時には  
お兄ちゃんは  
先に起きて朝ごはんを  
作ってくれてた  
でも お互いに  
一言もしゃべらないで  
ただ黙々と食べた  
何を話したらいいか  
わからないから...



...こんな風に  
恥ずかしくも平穏な毎日を  
過ごして来た僕らに  
それは突然やつて来た



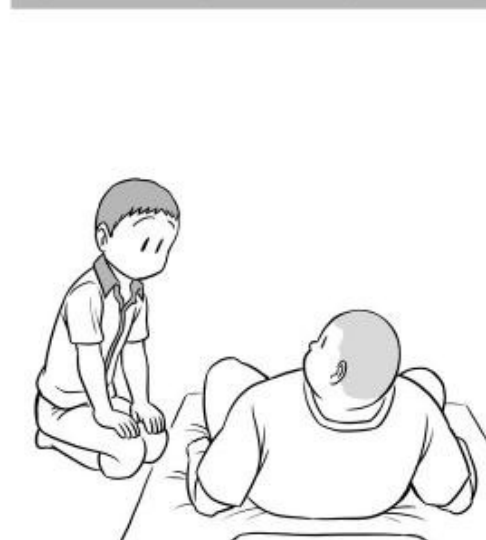
お兄ちゃんの様子が変わだ  
息が荒くて  
汗とかいっぱいかいてて  
何だかどうしても  
苦しそう...



どこか具合悪いのかな  
起こした方がいいのかな  
お母さんと呼んだ方が  
いいのかな  
ええとと...ええとと...



何だろう  
なんか変な匂いが  
部屋の中に満ちてきた  
青臭い葉っぱみたいな  
ツンとする匂い...  
なんだろうコレ?



「お前…誰にも言つたよ  
誰にも言つたじゃねえぞ!!」

カアア…!!

「これは…違つんだ  
お前のオネシヨなんかとは  
全然違つて…あの…」

「け・健康的な男子だったら  
誰でも起こりうる  
自然現象であつて…その…」

もぞ  
もぞ

解つてるよ  
解つてますよ

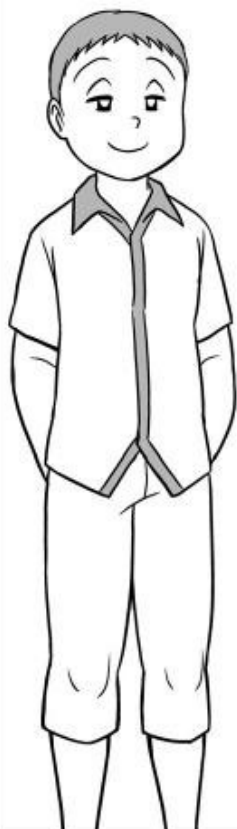
お兄ちゃんに  
何が起こつたのか  
僕にはすぐ  
解りましたとも

ニッコ  
ニッコ



そつだよねえ  
恥ずかしいよねえ

まさか中学生にもなつて  
オネシヨしちゃうなんて  
夢にも思わなかつた  
ろうしねえ



ニャ  
ニャ  
ニャ

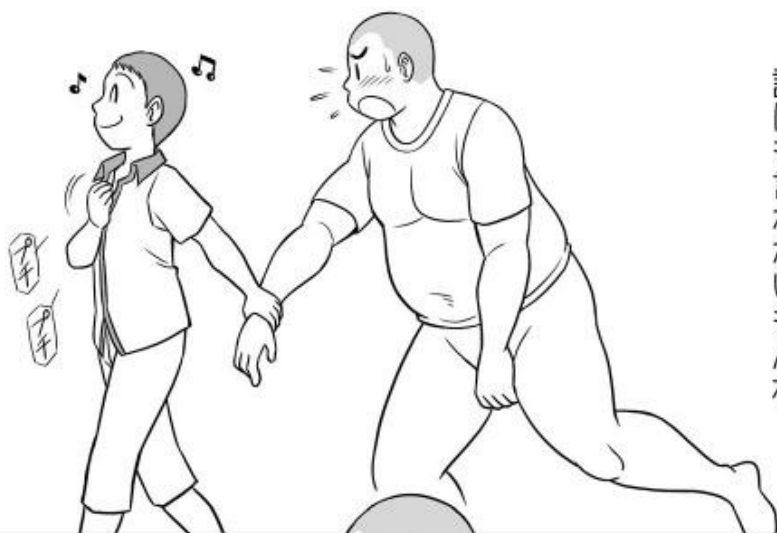
僕には痛いほど解るよ  
今のお兄ちゃんの  
苦しい気持ち  
情けなくて悔しくて  
泣き出したくて  
不安で不安で  
しょうがないんでしょ??



ニャ  
ニャ  
ニャ

大丈夫だよ  
誰にも言わないから  
言わないでいてあげるから

お兄ちゃんだって  
僕のオネシヨの事  
誰にも言わないもんね



そんなに  
照れなくていいから  
恥ずかしがる事ないから

お母さんにも  
内緒にしといてあげるから

…ほら早く  
パンツだけじゃなくて  
体の方も洗わないと

お母さんに  
見つかっちゃうよ？

安心して

今日は僕が  
お兄ちゃんのを  
洗ってあげるから

いつも  
洗ってくれてるんだもん  
やり方は解ってるから



うわあゝ すっこ…

お兄ちゃんのお  
チンチン触るの  
なんて初めてだよ

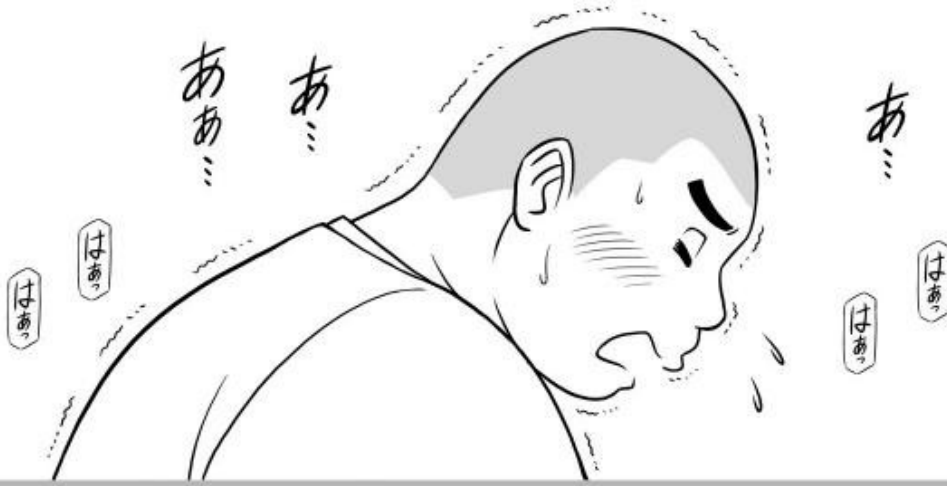
あれ？

でもお兄ちゃんのとて  
昔からこんな  
大きかったつけ…？

色も形もなんか  
違ってるような…？



お兄ちゃんつてもう  
毛が生えてるんだ  
すっげえ…  
大人みたいじゃん…



なんだ  
やっぱお兄ちゃんだつて  
硬くなっちゃうんじゃない



僕がオチンチン  
硬くしちゃった時は  
あんなにからかったりするクセにさ



「…おじいさんの  
お兄ちゃん？」  
「なんか苦しそう…」

「おじいちゃん  
人にオチンチン  
洗ってもらう事なんて  
そう無いだろっけ？」

「そんなに  
息荒くなるほど  
苦しいモンなの？」  
「体もこんなに震えて…」



「どろろか  
具合でも悪いの？」

「…ああそうだよ  
「お兄ちゃんは病気なんだ…」



「そんな事はいけない事なのに…  
毎日毎日エロい事ばかり  
考えるようになって…」

「考えたくもないのに  
妄想が止まらなくなつて…  
一日中 変な気持ちになつて…  
夜もよく眠れなくて…」



「オレ一年前とかは  
こんなんじゃないなかつたのに…  
こんなエロい奴じゃ  
なかつた筈なのに…」

「jjjjに悪い物がいらつぽん  
溜まっているからいけななんだ…  
jjjjを少しすつても  
絞り出していかないと…」

「お兄ちゃん…もう…もう…  
jjjjになつちまいそつだよ…」

そうか… だつておかしいもんね

あんな 青臭い匂いの汁が

オチンチンから出てくるなんて  
普通じゃ考えられないもんね

うわ…どうしよう

なんか怖くなつてきた

お兄ちゃん

そんなに具合悪かつたんだ

jjjjjjjjjj… jjjjjjjjjj…



「僕…jjjjしたらしいの…？  
僕に何か出来る事はないの…？」

「お兄ちゃんを助けてくれるか…？  
何をしても…許してくれるか…？」

お兄ちゃんは裸の僕を  
強く…強く抱き締めた



その意味は  
よく解らなかつたけど  
僕は「うん…」と返事した

だって…  
こんなお兄ちゃんをほっとけないもん…

僕がそう言つと  
お兄ちゃんは  
僕のパンツに  
手をかけて  
ゆっくり…  
ゆっくりと  
脱がしていった



これから何が  
はじまるんだろう…



お兄ちゃんが  
何をするつもりなのか  
僕には全然解らなかつたけど

お兄ちゃんの熱い体温が  
僕の肌に伝わってきて  
それがとても気持ちよくて

この時の僕は  
ちつとも怖くなかつたんだ…

お兄ちゃんは  
僕の体のあちこちを触りまくった

肌の感触と体温を  
存分に味わうように  
揉んで…吸って…舐めて…

僕の体を全部  
味わい尽くすように…

チューもいっぱいした

ほっぺにチュッてやるんじゃないかって  
舌を絡めて強く吸い合う  
大人の人がやるようなチューだ

そしてお兄ちゃんの口は  
僕の股間の方へ向かって…



ピンと硬くなったオチンチンをお兄ちゃんは熱心に頬張って舐め回した

ピチャピチャ音を立てて舐めて…舐めて…舐め回して…

なんでそんな汚い所を舐めるのか  
ちよつと不思議だったけど  
意外と嫌な気持ちはしなかった

それどころか 気持ちいい…  
なんでか解らないけど  
ずつとこうしてて欲しいと思う程  
すつこく気持ちいい…

なんか  
溶けちゃいそう…



僕たちは  
汗だくになって重なりあった

熱く熱く お互いの体が溶け合って  
くっつきそうになるくらい…

お兄ちゃんは  
僕のお尻の穴に指を入れて  
グリグリと掻き回してきた

お兄ちゃん…痛い…  
それは…ちよつと痛いよ…

ちゅ  
ちゅ

ぬっほ  
ぬっほ

「ちよつと無理かあ…」

まだ小さくて無理かあ…  
お兄ちゃんは  
ちよつとがっかりした  
感じで呟いた

「今口止めしなけど  
これからゆつくり時間かけて  
ここを開発してやるからな」

あ  
ほ

その意味は 解らなかつたけど  
耳元でそう囁かれて  
僕はちよつと 背筋がゾクツとした

べ  
べ

べ  
べ  
べ

わ  
わ

べ  
べ  
べ

い  
い  
い

そしてお兄ちゃんは  
僕のお尻の穴を指で拡げて  
お尻の内側に向かってべろべろと  
音を立てて舐め回した

お兄ちゃん…!!  
汚い!! 汚いよお そんな下口…!!

ん  
ほ

ほ

くすぶつた…いけど…けど…  
ちよつとそれ気持ちいい…  
オチンチン 舐められるのと  
同じくらい気持ちいいかも…  
ああ…!! ああ…!!



お兄ちゃんのおチンチンから  
白くてドロツとした物が  
ピュッピュッつてすごい勢いで  
噴き出した

ピクッピクッて  
体を痙攣させるお兄ちゃん

…これで大丈夫だよな？  
これでお兄ちゃんの悪いトコが  
少しは良くなるんだよな？

…でもねえ

これはお兄ちゃんには  
恥ずかしくて言えないけど

僕もお兄ちゃんと同じように  
おチンチンがピクピクッて  
なっちゃったんだよ  
(お兄ちゃんみたいな白い物が出なかったけど)

よく解らないけど  
これってイケない事なのかなあ…

僕たちは 数年ぶりに  
同じ布団で一緒に寝ました  
「オネシヨ…しちゃうかも  
しれないよ…?」



「かまわねえよ…  
一緒に汚れちまおう…」

お兄ちゃんが  
そつ言ってくれたので  
僕は安心して  
眠る事ができました…

それから僕は  
オネシヨをする事が  
無くなりました

ウソみたいに  
ピタツとおさまりました

いいんだぜ  
今日は  
我慢しくても

お母さん  
帰ってくるの  
遅くなるって  
言ってたから  
大声出したって  
かまわないぜ

でも その後  
僕も お兄ちゃんも

オシッコ以外のモノで  
布団を汚しちゃうように  
なるんだけど…ねw



ちよつと恥ずかしいし  
オネシヨした時よりも  
もつと変な気分になるけど

でも もうそんなの  
どうでもいいや…

お兄ちゃんと  
一緒だったら僕は…

僕は…

お兄  
ちゃん!!

お兄  
ちゃん!!

お兄ちゃん  
あああん!!



GOHAN

空想実験室



GOHAN / cik04770@rio.odn.ne.jp

発行 / 空想実験室(妄想研究所) 初出 / 2016年6月25日

※一部同人誌をGAY SHOP「BIG GYM」にて販売中です。

※ネットによるダウンロードサービスも展開中。詳しくは同人ダウンロード専用HP「DiGiket」まで